

Q06 戦時中はどんな格好をしていたの？

A 男性は軍服に似た国民服、女性はモンペを着用していました。

1944(昭和19)年ごろからは、防空頭巾や救急カバンを常時持ち歩くようになり、10・10空襲以降は寝るときにも男性は国民服とゲートル、女性はモンペを着用していたそうです。(『戦時資料 上巻』pp.161-162)



市民提供

Q07 捕虜になったあと収容所ではどんな生活を送っていたの？

A 残存家屋やテントに数世帯が同居し、食料や衣類が米軍から配給されたそうです。

出身地が異なる見知らぬ人との共同生活を強いられることもあり、配給されるものの質や量は収容所ごとに異なりました。農耕や家屋建設、道路整備、炊事洗濯などの作業に出ると、その代価として食料品などが支給されるため、多くの人が自主的に参加したそうです。(『戦時資料 上巻』pp.335-336)



沖縄県公文書館所蔵

Q08 糸満にも慰安所があったの？

A ありました。

戦争経験者の証言から、字糸満、字北波平、字山城、字南波平、字米須の5字にあったことが確認されており、村屋や民家が慰安所となっていたようです。(『戦時資料 上巻』pp.189-192)

『糸満市史 戦時資料』セット販売のお知らせ

『糸満市史 資料編7 戦時資料 上巻』
2003(平成15)年発行

明治の琉球処分から沖縄戦及び戦後の復興までの人々がどうやって戦争に巻き込まれていったかを詳細に追った戦時資料。沖縄戦を知るうえでまずはお読みいただきたい一冊です。

『糸満市史』は、糸満市立中央図書館で貸出のほか、市役所1階の総合案内と5階南側5番窓口の生涯学習課文化振興係にて、見本の閲覧が可能です。ぜひ、お気軽にお立ち寄りください。

また、5月1日より、『糸満市史 資料編7 戦時資料』の上巻(3,600円)と下巻(3,500円)をセットでご購入の場合、特別価格5,000円(税込)でご提供することとなりました。多くの皆様にご活用いただき、沖縄戦について再び深く考える機会としていただければ幸いです。

販売場所 》 ●糸満市物産センター遊食来(道の駅いとまん敷地内 キャッシュレス決済可)
●宮脇書店糸満店(サンエーしおぎさシティ内 キャッシュレス決済可)
●糸満市役所5階南側5番窓口 生涯学習課文化振興係(現金のみ)



問い合わせ先 生涯学習課 ☎ 840-8163

Q01 糸満の人たちはどうやって戦争に巻き込まれていったの？

A 1944(昭和19)年から部隊が配備され、同年10月10日には空襲により被災。翌年6月には、沖縄戦終焉の地となりました。

10・10空襲で不利な状況に立たされた日本軍は、作戦の変更を決断。軍主力を島尻地域に集結させ、本土決戦準備の時間稼ぎをする戦略持久作戦に転じました。玉砕も降伏も許されない状況下、日本軍の喜屋武半島への撤退で戦闘が継続され、糸満市で激しい地上戦となりました。(『戦時資料 上巻』pp.176,214-215,504)



沖縄県公文書館所蔵

Q02 どこに疎開したの？

A 主に宮崎県、熊本県、台湾などに疎開しました。

県外に出るのが困難になると、本島北部(山原)も疎開先となりました。集団疎開が縁となり、糸満市と宮崎県都農町は姉妹都市として提携しました。(『戦時資料 上巻』pp.193-198)



市民提供

Q03 アメリカ軍はいつ沖縄本島に上陸したの？

A 4月1日、読谷村周辺から上陸。6月6日、糸満では字北波平が最初に占領されました。

6月23日に日本軍の組織的戦闘は終わりましたが、6月30日まで掃討戦が行われ、7月2日に米軍の沖縄作戦終了が宣言されました。(『戦時資料 上巻』pp.239-271)



沖縄県公文書館所蔵

Q04 「学徒隊」って何？どんなことをするの？

A 中学校、師範学校の生徒で編成され、男子は通信隊と鉄血勤皇隊、女子は看護要員として戦場に動員させられました。

県内から1,000人を超える若者がかり出されましたが、多くが糸満で亡くなりました。(『戦時資料 上巻』pp.283-284)

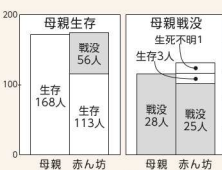


沖縄県公文書館所蔵

Q05 戦時中、妊婦さんはどうしていたの？

A 壕の中で出産するケースもありました。

生まれて間もない乳児を抱いて避難する女性や、収容所でも出産する女性もいました。「糸満市戦災調査」によると、戦時中の赤ん坊の戦没率は40.9%となっており、赤ん坊が生き残るには過酷な状況だったことがわかります。(『戦時資料 上巻』pp.477-480)



糸満市史「上巻」p.478

沖縄戦終戦から78年が経とうとしています。テレビやSNSでは毎日のように世界各地の戦争や紛争の報道があり、平和な社会は実現していないことを実感させられます。

なぜ戦争は起きてしまうのでしょうか？戦争になると暮らしはどう変わるのでしょうか？二度と繰り返してはならない、多くの経験者が発するこのメッセージの意味をもっと自分のこととして受け取るために『糸満市史 戦時資料』をひもといてみましょう。



5月23日、高嶺中学校の3年生は沖縄戦の実態を肌で感じ、平和への関心を高めるため、校区内にある慰霊碑や塔をめぐりながら、周辺のゴミ拾いボランティアを実施しました。生徒たちは碑や塔の前に、戦争の犠牲者となった人々へ鎮魂と恒久平和を祈り、静かに手を合わせていました。

次世代はどのように考えるのか

ここからは、5人の生徒たちが戦争に対して抱いた思いや、それぞれが考える平和のためにできることを紹介します。

城間 徠志



小学校の頃に慰霊碑や慰霊の塔へ行ったときと比べて、より興味がわいた。戦争が今後起きないように、私が大きくなって次の代に伝えるときには、戦跡へ連れていき、戦争の悲惨さや平和について興味を持ってもらえるようにしたい。

私たちが平和に暮らしているので、実際に戦争があったのかなと思っ
たし、戦争についてもっと考えることが必要だと慰霊碑や慰霊の塔に行
って思った。これからは、戦争の歴史を学ぶだけではなく、戦争経験
者から話をたくさん聞いて、後輩たちに語り継ぎたい。

大城 蓮



城間 大作



戦没者を祀る場所があるのは、本当に戦争があったことを証明する
もので、目の前にあることで、よりリアルに感じた。私たちは戦争
経験者と同じように話はできないので、動画や文章で残して、それ
を見せることで平和への思いをつないでいきたい。

慰霊碑や慰霊の塔のごみ拾いして思ったことは、ごみが少なく
て、みんな慰霊の日が近いことを意識しているのかなと思った。慰
霊碑を残すことが、次の代が平和を考えるときに必要だと思うので、
これからも大事にしていきたい。

新屋 清正



稲留 岬輝



たくさんの慰霊碑や慰霊の塔があって、激戦地だったと強く感じ
た。慰霊碑では、天国で幸せになってほしいという気持ちで手
を合わせた。戦争はだめなことだと思うし、次の代にもその気持ち
を持ってほしいので、戦跡に行っているいろいろ考えてほしい。



白梅の塔

沖縄戦で戦没した県立第二高等女学校の稲福全栄校長他、職員、生徒、同窓生149名を祀る。

沖縄戦では、二高女は生徒46名が3月24日、軍に動員された。生徒たちは、現八重瀬町富盛にあった第二十四師団第一野戦病院に配属され、負傷への看護にあたった。戦局が急迫すると、新城分院(現八重瀬町新城)、東風平分院(同町東風平)に移動、看護活動が続けたが、6月4日、解散命令を受け、弾雨の中で死の彷徨を続けた。

部隊の一部は、解散後、国吉の壕に拠って看護活動に専念したが、多くが犠牲となった。「白梅」は、白梅をデザインした校章にちなんでいる。



米里の塔

糸満市真米里部落一帯で戦没した第二十四師団歩兵第二十二連隊の佐藤少尉ほか将兵、住民12,000余名を祀る。真米里部落一帯は、6月中旬、強力な火器で押し寄せる米軍に対して住民も交えて戦闘が繰り広げられたという。

戦後、真米里部落住民が周辺に散在していた

遺骨を集め、同塔を建てて納骨して祀った。

この場所は、米上陸軍の主力部隊である米第十軍の司令官、サイモン・Bバックナー中將の戦死した地でもある。

戦争の記憶を風化させないため、本コーナーでは戦争経験者による証言などをお伝えしていますが、16回目の今回は、高嶺地区の慰霊の塔を紹介するとともに、高嶺中学校生徒の平和に対する考えをお伝えします。
戦争経験者が少なくなる中、慰霊の日を前に何を思い、沖縄戦の記憶を引き継ぐために何が必要か、それぞれの学生が自身の考えを教えてくださいました。